

日本スラヴ学研究会

飯島周先生追悼シンポジウム

2020年

12月5日(土)

14:00

17:20

14:00/14:10 日本スラヴ学研究会 2018/2019年奨励賞表彰式

受賞者 松尾梨沙氏(一橋大学特別研究員)

受賞著書 『ショパンの詩学 ピアノ曲《バラード》という詩の誕生』

(みすず書房 2019年)

14:10/15:30

開会の辞 三谷恵子(本会企画編集委員長)

冒頭挨拶 ミラン・スラネツ(駐日チェコ共和国大使館次席参事官)

石川晃弘(日本チェコ協会/日本スロバキア協会会長)

◆ 石川達夫(専修大学)

「飯島周先生のお人柄とお仕事」

◆ 長興進(本会会長)

「チェコスロヴァキア軍団側から見た

ヤロスラフ・ハシェク」

15:40/16:40

◆ ブルナ・ルカーシュ(実践女子大学)

「嚴重に監視された人間——

〇・シャインプフルゴヴァー『隔離』をめぐって」

◆ 大平陽一(天理大学)

「プラハ学派の戦後——

ボガトウィリョフとヤコブソンの場合」

16:45/17:15 質疑応答

17:15 閉会の辞 長興進(本会会長)

司会 三谷恵子(本会企画編集委員長)

事前登録

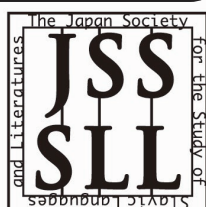
本シンポジウムはZOOMによるオンライン開催となります。参加希望の方は、12月4日までに slav@jssll.org 宛てにご連絡ください。当日、登録されたアドレスにZOOMのリンクを送信します。なお、会員については本会MLでZOOMのリンクを送信しますので、事前登録は不要です。

後援

駐日チェコ共和国大使館

チェコセンター東京

日本チェコ協会 / 日本スロバキア協会





飯島周 (1930 ~ 2020)

故飯島周氏は 1930 年生れ。東京大学で言語学を専攻、チェコ留学を経て、跡見学園女子大学で教鞭をとるかたわら、チェコ文学の翻訳、チェコ文化の紹介、日本とチェコの文化交流に努めてきた。跡見学園女子大学名誉教授、日本チェコ協会会長、日本スラヴ学研究会会長、日本チャペック兄弟協会会長を歴任。2009 年、チェコ文化普及の功績によりチェコ共和国政府より功労賞受章。

発表要旨

石川達夫「飯島周先生のお人柄とお仕事」

報告者が大学院生の時に知り合ってから以来、お亡くなりになるまで親交のあった経験から、飯島周先生のお人柄を偲ぶと同時に、チェコ文学の翻訳を多く手がけられたそのお仕事を振り返る。

長興進「チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク」

故飯島周さんのお仕事のひとつに、チェコのユーモア作家ヤロスラフ・ハシェクの翻訳が挙げられる。本講演では、軍団の機関紙『チェコスロヴァキア日刊新聞』に掲載されたハシェク関連の報道（12 編の記事を確認）に焦点を当てて、この謎めいた作家の行動を、当時の歴史の文脈のなかに置いて考えてみたい。「政治的正統性と文学の力」の狭間、というこの難題を、飯島さんだったらどのように「あしらわれた」だろうか、と考えながら。

ブルナ・ルカーシュ「嚴重に隔離された人間

—— O・シャインプフルゴヴァーの小説『隔離』をめぐって」

翻訳家としての飯島先生は、20 世紀チェコの代表的な作家カレル・チャペックの文学の翻訳に心血を注ぎ、日本におけるチャペックの人気に大きく寄与した。本発表では、感染症流行により強制される隔離生活をもたらす人間の思考の変化を主題とした、K・チャペックの妻 O・シャインプフルゴヴァーの晩年の作品『隔離』（日本語訳は『ズザナとマリエ』）に着目し、この作品の中心人物の状況と、今の私たちの新しい〈日常〉とのあいだに多くの共通点がみられることを示したい。

大平陽一「プラハ学派の戦後——ボガトゥィリョフとヤコブソンの場合」

ただチェコに興味を持っているというだけの理由で、飯島周先生にはとてもやさしくしていただいた。その恩義に報いたいとは思っているのだが、私はチャペックやサイフェルトについて語れるほどチェコ語が読めるわけではない。そこで無理を承知で、飯島先生が東大の言語学科の出身であり、当初はプラハ言語学サークルについて書いておられたことを口実に、ボガトゥィリョフがソ連帰国後に味わった苦労について、学生時代からの親友であったヤコブソンと比較しつつお話しさせていただきたい。プラハ言語学サークルのメンバーであったとは言え、飯島先生の関心からは遠かったに違いないロシアの民族誌学者のことしか話せないことには内心忸怩たるものはあるが、飯島先生ならお許し下さるだろうとも思う。